

## 市長定例記者会見 2008年10月14日

- ・ 日 時 平成20年10月14日（火）午前11時00分～
- ・ 場 所 本館3階第1会議室
- ・ 記者数 12人

議題 「フライブルク松山姉妹都市提携20周年記念松山代表团」について  
「ふるさと納税」について

それでは、今日の記者会見は始めに「フライブルク松山姉妹都市提携20周年記念松山代表团」について説明させていただきます。歴史を少し説明しますと昭和36年の青年海外派遣を皮切りにフライブルク市との交流が始まっています。そして松山市制100周年を契機として昭和63年10月にフライブルク市において、また翌年の平成元年4月に本市において、それぞれ姉妹都市提携の調印式が行われています。以来、環境分野をはじめとした行政間の交流はもとより、中学生海外派遣事業による青少年交流や市民団体の交流、経済界、大学の交流などさまざまな分野で活発な交流を続けているところです。そうした中、本年、フライブルク市での姉妹都市提携の調印から20周年の節目を迎えるに当たりまして、10月22日、現地において記念式典が開催されることになりました。そこで、わたしとともに、松山市議会議長や大学、経済関係者などによる総勢14名の代表团がフライブルク市を訪れ、式典に参加することといたしました。さて、この度の訪問では記念式典におきまして新しい関係が作られます。サッカーでは愛媛FCとドイツ・ブンデスリーガ2部に所属するSCフライブルクがフレンドシップ協定を締結し、両市の20年にわたる姉妹都市交流に新たな友好関係が加わることになりました。これは前にサロモン市長ともそういう関係ができれば、また一層深みが出てくるという話をしていたのですが、あちらでも市当局がフライブルクSC側とかなり話を詰めていただきまして、今回フレンドシップ協定が調印される運びとなりました。このSCフライブルクは、サッカーの本場であるドイツにおいても、創設は1904年で100年以上歴史を持った伝統あるクラブで、経営面や選手の育成、施設管理などに関するさまざまな知識などを当然持っているということです。本提携が愛媛FCにとって大きな刺激となって、今後の発展、躍進につながるとともに、スポーティングシティ松山の構築を目指す本市にとりましても、地域に密着したプロスポーツの一つであるサッカーに対する市民の関心がより一層高まって、ひいては地域の活性化につながるものと大いに期待しているところです。今回の20周年はこうした新たな交流が誕生いたしますので、たいへん意義深いものになると思いますし、訪問中は両市の交流の足跡を改めて振り返りますとともに、今後のさらなる姉妹都市交流の進展につなげてまいりたいと思います。また、わたしもフライブルク市の市議会でごあいさつをさせていただけることになっていると聞いております

ので、しっかりと仕事をしてまいりたいと思います。

次に「ふるさと納税」について説明させていただきます。本市のふるさと納税、『坂の上の雲』のまち松山応援寄附金については、今年5月の受け付け開始から5カ月が経過しまして、これまでに全国の54人の方々から、総額で245万2,000円の寄附をお寄せいただいております。本当に心から感謝をしております。その中には、お名前を出させていただくことにお許しをいただいたのですが、NHKのスペシャルドラマ『坂の上の雲』で、秋山兄弟の母親役を務める俳優の竹下景子さんからも、ご寄附をいただいております。「『坂の上の雲』のまちづくりに生かしてください」と、先日、ご厚意を賜ったところです。このように多くの皆さんの熱いふるさとへの思い、そして大きい期待に精一杯応えていきたいと思っております。そこで、このふるさと納税と連携し、今回、松山産の高品質な農林水産物を広く全国へ宣伝することにいたしました。具体的には一定額以上のご寄附をいただきました市外在住の人に、まつやま農林水産物ブランド品を紹介し、ご賞味いただいたご感想やご意見をいただくとともに、ご近所やご友人などへの宣伝のご協力をお願いするという、新たな取り組みを始めることといたしました。量的にはチラシをお配りしていますが、農協や生産者と話をしまして、趣旨を説明した上で非常に小柄なパック、広告宣伝がメインですから、そういう品揃えで選択していただくという形にしています。本市を応援してくださる全国の皆さんに、ふるさと松山で育まれた山海の幸を味わっていただくことは、松山への関心を呼び起こすだけでなく有効な宣伝にもつながるなど相乗効果が期待できることから、寄附のチラシやホームページもリニューアルして積極的に呼び掛けることといたしました。もちろん5千円以上の方、3万円以上の方、そのご寄附をいただいた範囲内での商品構成になっておりますので、その点をご理解いただきたいと思います。特に、この16日に東京で開催されます松山愛郷会の総会には約300名の本市出身の皆さんが一堂に会されますので、わたしも上京しまして、ご参会の皆さんへブランド品の紹介と併せて、ふるさと納税の寄附のお願いを全員にさせていただきたいと思っています。また市政や『坂の上の雲』のまちづくりの近況報告などもさせていただきたいと思っています。

詳細につきましては担当部から説明させていただきますのでよろしく申し上げます。

(質問)

ふるさと納税をした人に送るまつやま農林水産物ブランド品7品目の中から選べるということだが、予算措置はどうなっているのか。

(市長)

これは一般会計にはなるのですが、全国の自治体を見ますと、そういった費用・効果を度外視して寄附を集めようとしている自治体も見受けられるんですね。本市はそういう感覚をまったく持ち合わせていませんので、あくまでもPR。まつやま農林水産物ブランドは立ち上がってまだ2年ですから、あくまでもPRするいい機会だという捉え方と、寄附をいただいた金額が残るように商品構成を小さめにしてセットしていますからトータルで見ると会計は別になりますけれども、赤字が出ないようにしています。

(質問)

まつやま農林水産物ブランドの品目が増えた場合は、対象の品に追加されるのか。

(市長)

そうですね。まつやま農林水産物ブランドとして認定されたものについては、追加になると思います。

(質問)

ふるさと納税について、改めて市長の見解を確認したい。

(市長)

わたしは本来は別の形で地方財源の充実をすべきという考えを持っていました。なぜならば地方分権を進めていくのは時代の流れだと思うのですが、そこに財源、権限が伴わないとするならば、非常に意味のない地方分権になってしまいます。とりわけ三位一体改革で地方にとって非常に厳しい状況となったのが、税源移譲の不十分さだったと思うのですが、これについては、言わば国と地方の関係で考えるべき話です。本来は、国が例えば消費税のシェアの仕方であるとか、所得税、住民税の関係でこれは一部手直しがありましたけれども、国と地方の関係で税源の移譲というのをなすべき話だと思えます。しかし途中からですね、ふるさと納税というものが登場しまして、大都市と地方との間でやり取りをするという、国から見たら地方に税源をとっている声に応えられる非常に有利な制度だというのは、おそらく国の判断だったと思うのです。ですから、制度が導入されればじっとしているわけにいきませんから一生懸命やるつもりです。しかし本来の趣旨から言えば、今言ったように国と地方でやるべきものが地方と地方でやり取りをさせるというような方向にもって行かれてしまっているので、このことをもって国と地方の税源の見直しというものが、あいまいになるということだけは避けなければいけないと思えます。

(質問)

後期高齢者医療制度という保険制度について、改めて市長の見解を伺いたい。

(市長)

そのよし悪しというものを判断する材料をわたし自身が持っていないんです。なぜならば今後の見通し、それから制度の現状、そういったデータをつまびらかに分析した上でどうするかという答えが出てくるわけですから、これを持っているのは国の関係者だけです。ですからその中でどうしても必要だという判断を国がしたということしか言えない立場です。なぜならばその根拠になっている詳細が分からないから。もしそれを信じるとするならば、必要なのかもしれないけれども、ただよく分からないのが、わたしは民間にいましたから、通常、保険という業界の業を考えたときに、結局これはどれだけ分母を大きくするのかという話なんです。分母が大きくなればなるほど支え合いの力というものはそれに比例して大きくなっていきます。これはもう自然法です。ですからそれを小分けにしていくということが果

たして各制度の強化につながるのかどうか、その辺りのデータがどうなっているのか分かりませんから何とも言えませんが、本来の支えあう保険ということを考えると、分母を大きくする方が、力は出てくるというような考え方が一般的でもあり基本的なことだと思うのですが、その辺りがどうなっているのかということを知りたいという必要があるのではないかと思います。今回の後期高齢者医療制度については、そもそも導入のときの国の説明不足が非常に大きな不信感を買った要因だと思います。制度が始まる直前まで詳細すら決まらない、法律に実施主体として県後期高齢者医療広域連合が書き込まれていますから、法律にのっとってわれわれは今、事務作業を一生懸命していますけれども、初期段階においても詳細が決まったのは直前であり、そのあと出てくる問題についてもまったく想定していなかった節があるんです。さらに言えば、保険料の開示の問題。特にですね、わたしはかなり強行に言いましたけれども、国の関係者の口から出てきたのは大半の人の保険料は下がりますからという非常にあいまいな説明で周知する中で導入が始まりました。しかし本市も含めて大方の市町村は独自の低所得者対策なども行っていましたが、そういったことは何も考慮せずに弾いたんですね。結果として本市の場合は4万5,000人の対象者のうち、保険料が上がる人が2万5,000人、半分以上の人が上がるということ、この事実を前に大半の人の保険料が下がりますなんていう簡単な言葉で片付けられるような話ではないと、むしろ正確に言ってこそ、信頼につながると思いました。ですからこの制度はこういう理由でどうしても必要になります。そして実施するからには保険料が上がる人が何人で、下がる人が何人います。こういうきちんとした説明をしておけば、ここまでの不信感にはつながらなかったのではなかろうかと。もちろんその前提となる必要性の意義というものもよく分からないところもあると思いますけれども、それは国の人たちが分析をして決めたのでしょうから今はそれを信頼するしかありません。ぜひ今回の経緯を踏まえて、しっかりとした説明をしてもらいたい。実は厚生労働省から2週間くらい前に一枚の通知が届きました。各市町村が校区ごとに説明会を開けという通知が来たのですが、大半の市町村がそんなこと急に言われたって無理だという回答をしています。なぜならば今回の減免措置にしてもその後のいろいろな問題点の対応にしても何も決まっていらないんです。決まっていないうちでわれわれが説明会を開いたら、当然質問が出ます。答えられません。ですからこのように着地させるんだということをはっきりさせてからでないと、国が決めてくれないとわれわれは説明会なんかそんなに細かくできませんというようなことで不可能という回答を本市も出しました。大半の市町村がそういう対応をしていると思いますので、地域の実情に応じて開催願いたいというトーンダウンした文章に切り替わったのですが、今でもこんな状況です。

(質問)

大阪で発生した個室ビデオ店の放火殺人を受けて、先日、市内施設の緊急査察を行った結果、かなりのパーセンテージで消防法や建築基準法上の不備があったようだが、これらの店の定期的な点検が行なわれていたのかということと、もし点検が行なわれていなかった場合、これらの不備を取り締まる制度を設けるつもりはあるのか。

(市長)

今、現実にとどの程度の頻度でやっていたかということについては、担当部局から後で回答させていただきたいと思います。今回、あれだけの事件が実際に起きているわけですから、当然これから厳しく対応しなければいけないというように考えています。

(質問)

一つの地方自治体の長として今の中央の政局についてどのように考えているか。

(市長)

何回か申し上げたのですが、一番疑問に感じたのがこれだけやるべき課題が、例えば原料高が続いた中での経済政策をどうするのか、サブプライム問題に端を発した金融機関にどう対応するのか、あるいは中小企業の厳しい資金繰りの状況にどう対応するのか、国民生活も含めてですね、これだけ宿題が山積している中で、7、8、9月、3カ月国会が開かれていないということ自体が大問題だと思います。いったい何をやっているんだということは大半の地方自治体の首長さん、行政マンも含めてですね、国会が3カ月も休会していたということについては、非常に不満を感じています。それから政局についてはわたしも分かりません。ただ何かこう見ているとですね、あまりにも自己保身というか、何をやるかということが明確に見えないままどうすれば勝てるか、生き残るか、という自己保身が非常に拡大しているということを、やり取りをニュースなどで見ながら感じますので、その点は非常に不安と同時に政治に携わる者とすれば寂しい感じがします。

(質問)

S Cフライブルクとのフレンドシップ協定とは具体的にどのようなものなのか。

(市長)

両方ともプロリーグチームですが、プロチーム同士の交流というものはお互い試合日程が長きにわたって年間やっていますから、それはなかなか実現できるものではないのですが、特に中心になるのはおそらくユースの交流だと思います。ユースの交流を通じてお互いの技術レベルのアップにもつながっていくでしょうし、また選手たちのモチベーションも早い時期に国際交流することによってより一層の高い意識を持ってきっかけになるのではないかと思います。それから愛媛FCはご存知のとおり、誕生してから短い歴史しかありませんが、先ほどお話ししたS Cフライブルクは100年以上の歴史を持っていますから、当然そこには蓄積された運営のノウハウであるとかファン層へのアピールであるとかいろいろなノウハウを持っていらっしゃると思うので、どちらかと言えば愛媛FCにとっては有利なフレンドシップ協定になるのではないかと個人的には思っています。

(質問)

具体的な作業というか、国際交流する際の段取りなどは誰がするのか。

(市長)

もちろんきっかけはわれわれ行政もかなり仕掛けましたが、以前も姉妹都市って何だろうというお話を受けたときに、橋を架けるまでが行政のしっかりした役割りで、その後はその橋をいろいろな目的を持った人が自由に行き来できるようなサポートするというのが行政の役割りだと思いますので、ここから先の本格的な交流については愛媛FCとSCフライブルクで企画立案をしていくというようになるかと思います。

(質問)

ふるさと納税者へのまつやま農林水産物ブランド品を送る事業はすでにスタートしているのか。

(市長)

もうすでにスタートはしています。

(質問)

これは市内向けのパンフレットなのか。

(市長)

これは市外向けです。これから各県人会の総会なども始まってきますので、すべてわたしが行けないので副市長や部長なども含めて、県人会が一番対象となる方がいますのでそこを中心に働きかけをまずやると、別に愛媛県にゆかりがなくても構わないわけです。『坂の上の雲』のファンだから松山に寄附をしようということでも構わないので、それらの広がりについてはこれからいろいろな機会をとらえて、ぜひこういうのを松山市で用意していますから、皆さんも利用して宣伝マンになってくださいという運動を広げていきたいと思っています。それから自分の個人的な会議、例えば東京や大阪であるときとか、あるいは同窓会とかそういうところにもチラシを持って行ってみようかなとは思っていますので、まず率先してやってみたいと思います。この前も東京の会合で言ったのは小説『坂の上の雲』は二度とドラマ化されない、1回限りの映像化に向けていま撮影しているので、皆さんのお金が有効に活用されますと言って宣伝させていただきました。

(質問)

お届け時期として12月、2月、3月、通年として区分けされ、「紅まどんな」であれば12月になっている。例えば納税者が3月に寄付をして「紅まどんな」が欲しいと言えば、その年の12月に送るということか。

(市長)

そうです。「紅まどんな」は作るのが非常に難しいのですが、旬の時期にお届けします。

(質問)

要するに12月の納税者を対象に「紅まどんな」ということではなくて、あくまで納税者が選べるということか。

(市長)

そうです。

(質問)

近いうちに予想されている総選挙について、市長個人の見解として愛媛1区でどの陣営を応援するのか。また情勢はどちらに有利かなど教えてほしい。

(市長)

完全に中立でございます。逆に言えばやることが多くて、とにかく市政にまい進すると、特に今年は来週からフライブルク市への訪問もあります。また来月にはブラジル国への訪問があり、これは2泊6日というスケジュールなのですが、本当にめったにないことですのでお祝いに行こうと思っています。ともかく正々堂々と立候補を予定されている3名の方が立派に主張を展開されて有権者の審判を仰いだらいい話かなと思います。情勢は分かりません。